

東京外国語大学国際日本研究センター主催

夏季公開セミナー 2012

言語・教育・文化

— 国際日本研究の試み —

2012年7月18～20日(水～金) 10:00～17:00

会場：東京外国語大学府中キャンパスアゴラグローバル3階プロジェクトルーム

- ◆ JR 中央線「武蔵境」駅のりかえ西武多摩川線「多磨」駅下車徒歩5分（JR 新宿駅から約40分）
- ◆ 京王電鉄「飛田給」駅北口より多磨駅行き京王バスにて約10分「東京外国語大学前」下車

東京外国語大学国際日本研究センターは今年度より夏季公開セミナーを開催します。このセミナーは、アジアを中心に、国内外で活躍している研究者を講師にお招きし、大学院生・研究者に、これまで・これからの日本語・日本研究を学ぶ機会を提供するために開催します。言語・文化・歴史・文学・教育などの分野において各国・各地域で進展している日本研究の現在に触れてみませんか。ぜひ、ふるってご参加ください。

Program

※8コマ 各90分（講義60～70分とQ&A）+ 同会場でワークショップ30分～予定

時間	開場	18日(水)	19日(木)	20日(金)
10:00 } 11:30 (12:00)	3A	三宅登之氏 [東京外国語大学] 「切れ目を入れる“了”と引き伸ばす“着” —中国語におけるアスペクトマーカ― の図地分化の働き—」	山口裕之氏 [東京外国語大学] 「＜表象文化論＞の展開― その動態的把握のために」	望月圭子氏 [東京外国語大学] 「日本語学習者誤用コーパスにみる 日本語学習者の誤用の類型 —英語母語話者と中国語母語話者の場合—」
13:00 } 14:30 (15:00)	3B	趙華敏氏 [北京大学外国語学院] 「日本語と中国語の「好まれる言い方」について —発想の相違と表現形式に焦点をあてて—」	蕭幸君氏 [台湾・東海大学] 「＜われわれ＞で語り得ぬもの― 映画「セデック・バレ」の表象をめぐって」	徐一平氏 [北京外国語大学] 「コーパスによる日本語研究の事例 —周辺的な言語現象をめぐって—」
15:00 } 16:30 (17:00)	3A	任榮哲氏 [韓国・中央大学校] 「韓日のコミュニケーション・スタイルの 違いをめぐって」	ジャーナル国際編集顧問会議	尹鎬淑氏 [サイバー韓国外国語大学校] 「韓国における日本語教育の新パラダイム —eラーニングとスマートラーニング—」

7/20(金) ワンコインパーティ@アゴラカフェ開催予定

《お問い合わせ》東京外国語大学 国際日本研究センター

[電話] 042-330-5794 [メール] info-icjs@tufs.ac.jp [URL] <http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/>

東京外国語大学国際日本研究センター主催 「言語・文化・教育—国際日本研究の試み—」
夏季公開セミナー 2012

日時：2012年7月18-20日(水-金)10:00-17:00 会場：東京外国語大学府中キャンパス アオラグローバル3階プロジェクトルーム (3A, 3B)

※プレ企画：7月17日(火)13:00～研究講義棟109室にて、「霧社事件」に関する上映会を行います。

18日(水)

10:00-11:30(12:00) 「切れ目を入れる“了”と引き伸ばす“着” —中国語におけるアスペクトマーカの図地分化の働き—」
会場：3A 三宅登之氏（東京外国語大学）

中国語では、アスペクト助詞「了」は動詞に後置され動作の完了を表し（「买了」＝買った）、同じく「着」は状態の持続を表す（「坐着」＝座っている）。しかし、動作が完了・持続していても全ての文で「了」や「着」を生起させると、たとえ単独の文においては統語的に問題なくとも、談話全体としては極めて不自然になる。これは、「了」はその完了を表す性質から、事態を有界の (bounded) ものとし、談話内で前景化させる働きを持つ一方、「着」は状態が持続した非有界の (unbounded) ものとし、談話内で背景化のマーカーとして機能している点が原因となっている。このように中国語の「了」「着」の使用に、点的なアスペクトを持つ事態は知覚の上で注意の向けられる対象である図 (figure) となり、アスペクト的に幅を持つ事態はその背景になっている部分である地 (ground) となるという図地分化 (figure-ground distinction) のメカニズムが色濃く反映されている。本講義のテーマの中心は中国語にまつわる現象であるが、日本語の事例も対照させながら、中国語の学習経験のない方々が臆読しても問題なく理解できる、わかりやすい講義を行う。

13:00-14:30 (15:00) 「日本語と中国語の『好まれる言い方』について ―発想の相違と表現形式に焦点をあてて―」
会場：3B 趙華敏氏（北京大学外国語学院）

認知言語学の基本的な概念の一つに「事態把握」(construal 解釈／捉え方)というのがある。事態に関する捉え方の如何かによって表現形式も違ってくる。授受表現は従来、中国人日本語学習者にとって難点の一つである。その原因はどこにあるのか、いろいろな解釈があるが、本講義は「事態把握」の立場から解釈してみる。それと関連して、中日の「事態把握」の相違によって、表現の仕方に与えらる影響について実例を通して説明してみる。

15:00-16:30 (17:00) 「韓日のコミュニケーション・スタイルの違いをめぐって」
会場：3A 任榮哲 氏 (韓国・中央大学校)

私たちが普通、人と話をする時には、無意識的であれ意識的であれ、会話を円滑に運ぶためのさまざまな方略（ストラテジー）がとられている。いつ話しはじめていつやめるのか、どんな話題を選ぶのか。どんな調子で、どのくらいのスピードで話すのか。またジェスチャーを使うのか。こうした話し方を構成する要素やストラテジーは、広くコミュニケーション・スタイル (communication style) と呼ばれ、民族、地域、階級、ジェンダーなどの話者の帰属グループにより、さまざまに様相が変わるものである。コミュニケーション・スタイルとは、言い換れば話し方の「型」であり、また女性なら女性らしい、日本人なら日本人らしいといった意味での「らしさ」と関係するものとも言える。では、日本人から見た韓国人らしい話し方、韓国人から見た日本人らしい話し方とはどのようなものだろう。ここでは、韓国人と日本人の挨拶、話題、相槌を中心として論を展開していきたい。

19日(木)

10:00-11:30 (12:00) 「＜表象文化論＞の展開 ―その動態的把握のために」
会場：3A 山口裕之氏（東京外国語大学）

「表象文化論」あるいは「表象文化」という言葉は、今では人文系の大学教育・研究の場でかなり一般的に用いられる語彙に属するものとなっている。この呼称はおそらく、東京大学教養学部(駒場)の「表象文化論」学科の開設(1986年)以来、次第に広まっていったものだが、他の多くの人文学の学問領域とは異なり、学問的・制度的なものとしては、むしろ日本に端を発する研究・教育セクションとして自己形成の途上にあると言えるだろう。「表象文化論」について語る上で、その出自やその後の展開を考えると、駒場の「表象文化論」でそれがどのように構想され、推し進められてきたかについて述べることは不可欠だ。しかし、それだけでなく、この新たな学問領域が、どのような広がりをもって他の教育・研究機関などで現在展開されつつあり、そしてどのような仕事が生み出されつつあるかを概観していきたい。それによって「表象」あるいは「表象文化」という概念についてのより明確なイメージを獲得してもらうことも、ここでの大きな目的の一つである。

13:00-14:30 (15:00) 「<われわれ>で語り得ぬもの 一映画『セデック・バレ』の表象をめぐる」
会場：3B 蕭幸君氏（台湾・東海大学）

2011年9月の末から立て続けに、映画『セデック・バレ』の上・下編が台湾で上映されて以来、大きな波紋を呼んだ。そのもっとも議論されたところは、映画のなかに出てきた「霧社事件」がどのように語られるかであるが、この出来事は台湾の人々の歴史観に一石を投じるものでさえあると言える。政権交代するたびに書き換えられてきた言説に翻弄され続けてきたにもかかわらず、植民地時代の台湾で起きたこの事件を語るときはジレンマを感じることなく、なぜか人々はそれを<われわれ>の物語として語ってしまふ。それだけではなく、映画のなかで表象された「日本」「台湾」あるいは「原住民」のありかたに、やはり疑念を禁じ得ない。今回は、映画『セデック・バレ』にみられる表象の諸問題と、現在の台湾社会が抱えている問題と照らし合わせ、その考察を報告することとする。

20 日 (金)

10:00-11:30 (12:00) 「日本語学習者誤用コーパスにみる日本語学習者の誤用の類型 ―英語母語話者と中国語母語話者の場合―」
会場：3A 望月圭子氏（東京外国語大学）

13:00-14:30 (15:00) 「コーパスによる日本語研究の事例 ―周辺的な言語現象をめぐって―」
会場：3B 徐一平氏（北京外国語大学）

90年代からコンピューター・テクノロジーの飛躍的な発展により、現代の言語研究はコーパス言語学抜きでは語れない。研究の深化により伝統的な研究分野の課題に新しい知見を加えることは難しく、日本語の文法研究はボトルネックの状態に陥っていると言えよう。この状況から抜け出すべく、研究者の直感や内省又は作例という今までの研究方法を問い直し、大規模コーパスにより現実の用例、用法のきめ細かい観察・分析を行おうとする動きがある。記述文法の研究が格やボイスからモダリティまで高いレベルに達し、文レベルの記述による新しい成果をあげることが難しく、他の研究分野との連携や新しい研究方法の開発が余儀なくされている。言語研究は、言語資料なしには行えず、人々が納得できる言語記述なしには、言語理論も単なる空中の楼閣にすぎない。言語資料の収集方法と使い道により、現代の言語研究は、内省法、誘出法、コーパスに基づく方法という三つに大別できる。この中で、特にコーパスに基づく方法と関連させ、日本語の「～ながら」の特殊用法について説明していく。

15:00-16:30 (17:00) 「韓国における日本語教育の新パラダイム ―eラーニングとスマートラーニング―」
会場：3A 尹鎬淑氏（サイバー韓国外国語大学校）

21 世紀はグローバル化・情報化の時代、知識基盤教育を必要とする時代で、インターネットの発達と、コンピュータ技術の発展による教育の大革命が行われ、サイバー空間を新しい教育の場とする e ラーニングが幅広く行われている。この流れに併せて、日本語教育においても e ラーニングが活発に行われている。e ラーニングとは、情報技術を活用し、いつでも、どこでも、誰でも、学習者が求めるレベルに合わせた学習を行うことができるシステムで、従来の教育の場と比べると、学習空間と学習経験がより広がり、学習者の主導性が強まる教育で、ICT 活用の教育と同じ意味を持っている。これに対して、スマートラーニングとは、スマートフォンやタブレット PC などのスマート機器を使った学習で、学習者はいつでもどこでも学習することが出来、教師側はスマートフォンを使った学習計画の作成や管理だけでなく、学習進捗状況がスマート機器を通してリアルタイムに確認することが出来るだけでなく、授業でインターネットなどにアクセスし、そこで得た情報を有効に活用することでより効率的に学習指導を行うことができる。韓国の携帯電話会社のデータによると、4 月 11 日現在、韓国国内のスマートフォン利用者数は 2672 万人に上る。これは携帯電話加入者数全体（5255 万人）の 50.84% と全体の半数を占める。本講義では、韓国の日本語教育における最新の教育トレンドである e ラーニングとスマートラーニングの日本語教育法などについてみていきたい。